

パイとやきがたのはなし

ベアトリクス・ポッター さく・え

おおくぼ ゆう やく

パイとやきがたのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え
おおくぼゆう やく



ネコちゃんぬくぬく——まったくだこと
さんぽの子犬——「あらネコちゃんさん
お元気、おくさん？ おくさん、お元気？」
「どうも子犬さん、おたがいさまよ！」

古い歌より



むかしむかし あるところに リービという ネコちゃんがありました。ある日、ダッチェスという 子犬を お茶に おまねきすることに。

リービの お手紙は こうです。「ごつごうの よいときに おこしてください。とってもとっても すてきなものを 手に入れまして。なので 白地で ふちどりかもも色の パイざらで つつみやきに するつもりです。きっと はじめて あじわう おいしさですよ！ ひとりで べろり たいらげること まちがいなし。わたしは マフィンで かまいません。」と リービは 書き書き。

このお手紙を よんだ ダッチェスは おへんじ したためます ——「では よろこんで 4時15分に うかがいます。ところで ふしぎなことも あるものですね。わたくしも こちらで ゆうげはと おまねきに うかがおうと していたところで。たいそう びみなものが ございまして。

それでは お時間どおりに まいります。」と 書いてから ダッチェスは おわりに こう つけくわえます。「ただ ネズミの パイは ちょっと ……」



THE INVITATION

とはいえ あとで ぶしつけだなと 思いなおして、〈た〉だけ のこして あとは けし、〈たのしみに しております〉に 書きかえました。そして お手紙を ゆ うびんやさんに わたします。

それでも リービの パイのことが たいへん 気がかりなので、 なんども くりかえし リービの お手紙を よみかえました。

「きっと ネズミパイですわ、 どういたしましょう！」と ダッチェスは ひとりごと ー「むり、 ネズミパイを 口にするなんて むりですの。でも お茶会ですもの、 口にしなきゃ しつれいですわ。こっちで 子牛と ブタももの パイを 作るどころでしたのに。白地に ふちどりが もも色の パイざら！ そうですわ、 うちにも ございます、 リービの おさらと おんなじものが。だって どちらも ぐいぐいタビサのところで 買ったんですもの。」

ダッチェスは たべものおきばに 入りこみ、 たなから パイを おろして まじまじ。



「あとは オーヴンに 入れるだけ。 うっとりするほどの パイきじ。 きじが かたくずれしないよう、 ちっちゃな かなもの やきがたを なかに 入れてごさいますから、 まんなかに フォークで あなを あけて ゆげが にげるように してありますの —— んもう、 できれば こっちを 口にしよう ございますわ、 ネズミパイじゃなくって！」

なやみに なやむ ダッチェスは また リービの お手紙を よみます —— 「白地に ふちどりが もも色の パイざら —— ひとりで ペろり。 〈ひとりで〉って わたくしのこと —— となると ご自分は お召し上がりにならないってこと？ 白地に ふちどりが もも色の パイざら！ リービは マフィンの 買い出しに お行きになるはず あっ、 思いつきましたわ！ そうですの、 リービが おるすのときに かけ足で リービの オーヴンへ このパイを 入れればよろしいのよ！」



ダッチェスは じぶんが さえてると おおはしゃぎ！

そのころ リービは ダッチェスの おへんじを うけとり、 その子犬さんが お

こしになると 知るや すぐさま ー パイを オーヴンに ひょいと 入れます。
ふたつ たてに つまれた オーヴンには、 ほかに つまみや とつてが あれ
これ ありましたが、 ただの かざりで あけるためのものでは ありません。 リービが
パイを入れたのは 下のオーヴンで、 とびらが かたいのでした。
「上のオーヴンは 火が つよすぎるのよね。」と リービは ひとりごと。「ネズミの
ひき肉と ベーコンの パイ、 とろけるように やわらかく 肉じる たっぷり
。 こぼねも みいんな とつてある。 だって この前の お茶会で ダッチェス、
魚の こぼねで のどを つまらせそうに なったんだもの。 食べるのが ちょっ
と 早いよ ー まあ 一口も 大きめだし。 でも そだちのいい おしとやかな
子犬よね。 いとこの ぐいぐいタビサに くらべれば どこまでも上の おきゃ
くさまだわね。」



THE PIE MADE OF MOUSE

リービは 石炭を つんで、 だんろのそこを きれいに。 それから バケツを
もって 外の井戸まで 出て、 やかんに入れる 水を くみます。
つぎに とりくむのは そのへやの おととのえ。 というのも この台所は いま

もかねていたのです。げんかん口でしきものをひとつひとつぱたぱたしたあと、きっちりとしきなおしまして、だんろ前にしくのはウサギのけがわ。

だんろ上の時計やおきもののほこりをはらい、テーブルやいすもみがいたりこすったり。

つづいてあらいたでのまっ白なテーブルクロスをひろげ、とっておきのせとものティーセットのしたく、だんろそばのつり戸だなからとりだします。ティーカップには白にピンクのバラがあしらってあり、とりざらは白地に青。



テーブルをととのえたリービは、水さしととりざらを手に、野原をくだってまきばへ、ミルクとバターをとってくるのです。



BUTTER AND MILK FROM THE FARM

もどってきたときに 下のオーヴンを のぞくと、 パイの ぐあいも いいかんじ

かたかけと よそ行きの ぼうしを みにつけ、 リービは かごを 手に また
おでかけ、 村のお店で お茶っ葉 ひとつつみと 角ざとうを 500グラム、 あ
と マーマレードを ひとつびん 買うのです。

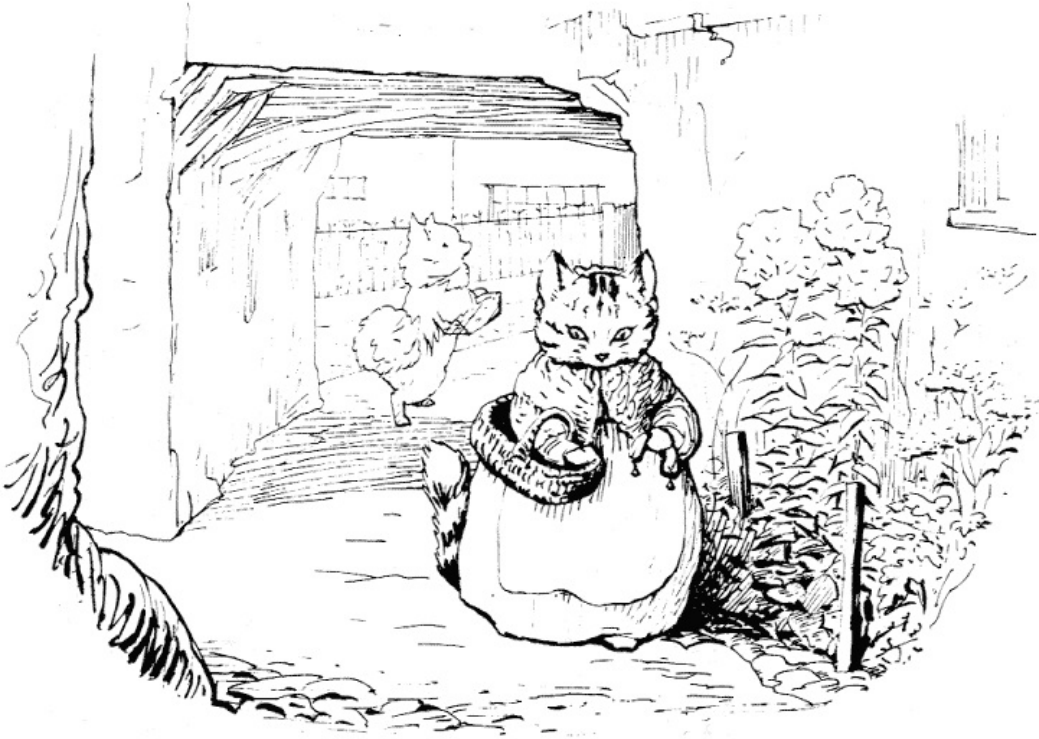
ちょうど おなじころ ダッチェスも おうちを 出ました。 ふたりの おうちは
村の はしと はしに あります。



THE VEAL AND HAM PIE

リービが 道すがら 出会った ダッチェスは、ぬのを かぶせた かごを 下げ
ていました。おたがいに おじぎだけして 口は かわしません。あとで お茶会
が ありますからね。

角を まがって 見えなくなると、ダッチェスは すぐさま 一一 ひたすらに
かけ足！ リービの おうちへ いちもくさん！



店に入ったリービは いるものを買って、いとこのぐいぐいタビサと たのしいせけん話を してから 外へ 出ます。



いとこの タビサは おしゃべりのあとに 本音が 出まして ——
「子犬だなんて！ まるで ソーリー村には ネコが いないみたいに！ 午後のお茶に パイですって？ けっこうですこと！」と ぐいぐいタビサ。

リービは ぱんやきティモシーのところに よって マフィンを買いました。 そ

うして おうちに かえります。

すると なにやら うら口から がさごそという もの音が。 ちょうど おもてから うちに 入ったときでした。

「パイにしては へんな音ね。 スプーンは まだ しまってるし、 だとしたら。」と つぶやく リービでしたが、

そこには だれも おりません。 てこずりながらも 下のオーヴンの とびらを あけて、 パイの むきを ととのえます。 やきネズミの いい かおりが してきました！



WHERE IS THE PIE MADE OF MOUSE ?

そのときには もう ダッチェスが うら口から しのび出たあと。

「けったいなことですよ、 入れかわるはずの リービの パイが オーヴンに ございませんの！ どこにも 見あたらないなんて。 いえじゅうを おさがしたのに。

こっちの パイは ほどよく あたたまった 上のオーヴンに お入れしました。ほかの とっては まわりませんし、 きっと みんな 見た目だけのものですね。」と ダッチェス。「それにしても ネズミパイを おかたづけしとうございました

のに！ どこへ やったのか さっぱり。 この音は リービの おかえりね、 いそいで うらから 出ないと！」



おうちへ もどった ダッチェスは うつくしい 黒の 毛なみに くしを かけます。 それから リービへの 手みやげに にわの お花から 花たばを こしらえました。 あれこれするうち やがて 時計が 4ど なります。

リービは —— さぐりに さぐって 戸だなにも たべものおきばにも だれひとり かかれていないと なっとくしたあと —— 上に あがって おきがえしました。

お茶会用の ふじ色の きぬの ワンピース、 それから ししゅう入りの モスリンの エプロンに 前かけを みにつけて。

リービは つぶやきます。「あらあら？ あの引き出し、 あけっぱなしに してないはずよ。 だれかが わたしの なべつかみ つけようとしてたってこと？」

下に もどって、 お茶を 入れた ティーポットを オーヴンの上におきます。

もう1ど 下のオーヴンを のぞくと、 パイは すてきな きつね色で、 ほかほか ゆげが 出ていました。



READY FOR THE PARTY

だんろ前に こしを おろして、 子犬を まつ リービ。「下のオーヴンに して
よかったわ。 上のは きっと あつすぎどころじゃないわね。 あら、 戸だなの
戸が なぜか あいてる。 まさか ほんとに だれかが このうちに？」

4時きっかり、 ダッチェスは お茶会へと 足を むけます。 村を びゅーんと
つぎつたので 早すぎて、 リービの おうちへ つづく こみちで ちょっとば
かり 時間を つぶすはめに。

「ええと、 もう リービは こっちのパイを オーヴンから おとりだしになってる
かしら。」と ダッチェス。「にしても、 のこりの ネズミパイは いったい どう
おなりなんでしょう。」



かっきり4時15分、たいそうおしとやかにとんとんとたたかれるドアの音。「リブストンのおくさまはございたく？」とげんかんにてダッチェスはおたずねします。

「どうぞ！こんにちは、ダッチェスさん。」とリービは声をはりました。「お元気そうで。」

「それはもう、おかげさまで。あなたはどうですか、リービさん。」とダッチェス。「おみやげにお花をもってきましたの。まあおいしそうなパイのにおい！」



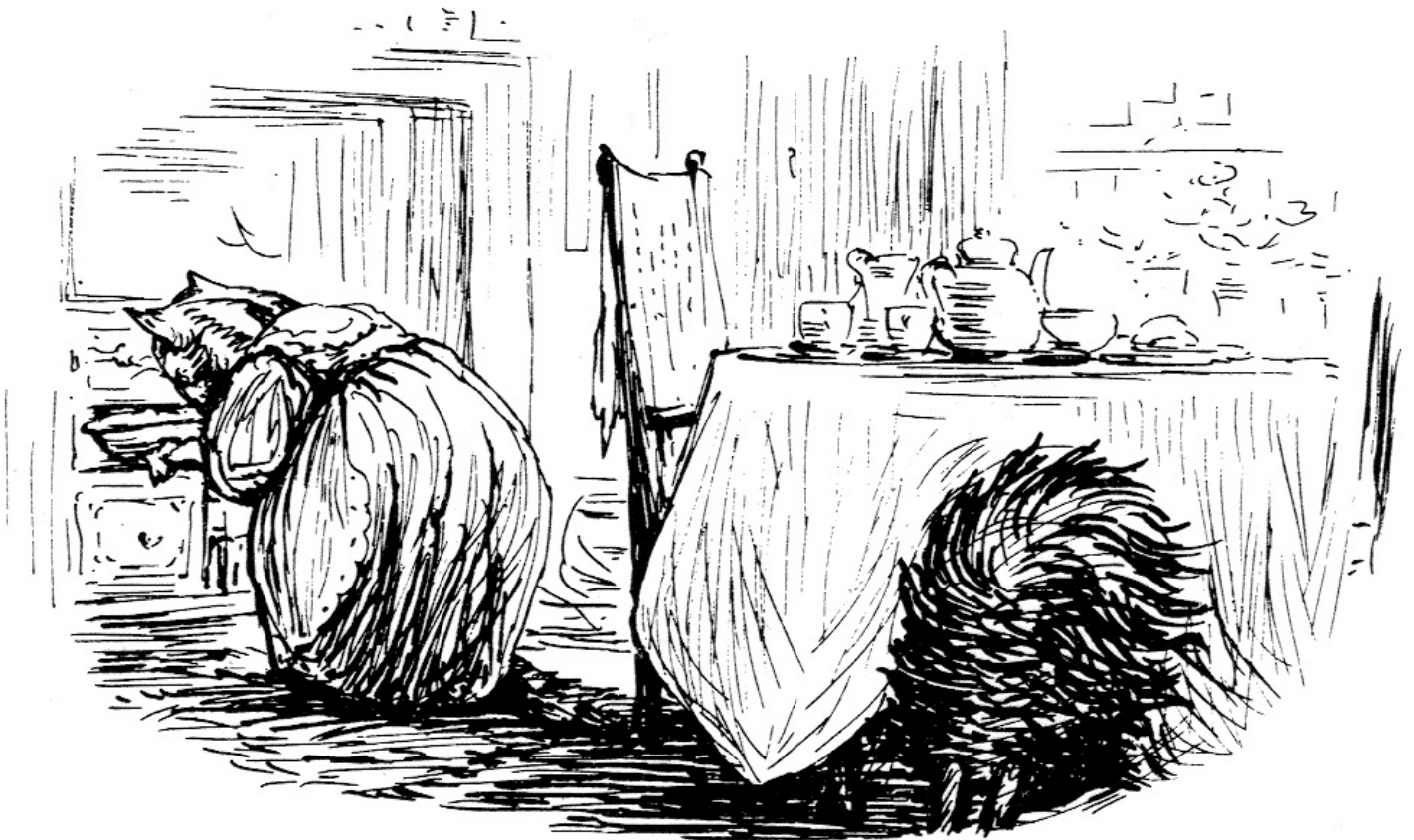
DUCHESS IN THE PORCH

「う～ん、 素敵な お花！ そうなのよ、 ネズミと ベーコンのね！」
「食べものの 話は それくらいにして、」と ダッチェス。「素敵な 白の テーブルクロス！ やきかげんは もう よろしいの？ まだ オーヴンのなか？」
「たぶん あと5分ってとこね。」と リービ。「もう ほんのちょっとだけ。 お茶 入れますわ、 まつあいだ。 おさとうは います？ ダッチェスさん。」
「ええ おねがい！ リービさん あと、 ひとつ はなさきに のせても よろしい？」
「いいですとも、 ダッチェスさん。 なんて おみごとな ちんちん！ まあ あいらしい かわいらしい！」



ダッチェスは 自分のはなさきに 角ざとうを のせ、 ちんちんしながら くん
くん。

「あのパイの かぐわしいこと！ 大好きなの 子牛と ブタ —— じゃなくて
その、 ネズミと ベーコンね。」



そこで うろたえて さとうを おっことし、 ティーテーブルの 下へ さぐりいるはめに なったので、 リービが パイを とりだすさい どちらの オーヴンを あけたか、 見のがしてしまう ダッチェス。

リービは パイを テーブルに おきました。 とっても そそる においが します。

テーブルクロスの下から さとうを ほおぼりながら 出てきた ダッチェスは そのまま いすの上で ちんちんしました。

「とりあえず パイを 切りわけてあげますね。 わたしは マフィンに マーマレードつけて 食べるつもりですから。」と リービ。

「そんなに マフィンのほうが お好き？ なかに やきがたが！」



「なんですって？」と リービ。

「な、 なかみ、 これ マーマレード？」と あわてて いいなおす ダッチェス。

はたして パイは 味わいぶかく、 マフインは ふわふわ ほかほか。 どんどん なくなります、 パイは ことさらに！

「きっと。」——（と ダッチェスは かんがえごと。）——「きっと、 自分で とりわけたほうが よろしゅうございましたわ。 ですが リービ、 お切りになるさい なんにも お気づきにならなかったみたいね。 あら こんな こまぎれの ぐの なかに 入れたんでしたっけ！ こまかく ミンチにした おぼえは ないんですけど。 それに うちのより 火の つよい オーヴンですね。」



「やっぱり ダッチェスは 食べるの 早いわね！」と ダッチェスは かんがえごとをしながら、 5つめの マフィンに バターを ぬりぬり。



パイザらの なかみは どんどん なくなっていくます！ ダッチェスは もう 4 もりめが おわって、 今は スプーンで なかを こねかえしていました。
「ベーコン もうちょっと います？」と リービ。
「おかまいなく、 リービさん。 ただね やきがた はずこかなって。」



WHERE IS THE PATTY-PAN ?

「やきがた？ なんのこと？」

「パイキジのかたくずれを 心せぐ やきがたが。」と ダッチェスは 黒い 毛なみに うもれた かおを まっかにします。

「まあ そんなの 入れてませんよ、 ダッチェスさん。」と リービ。「ネズミパイには いらないと 思いますけど。」

ダッチェスは スプーンを こねくりまわして ー「見あたりませんの！」と そわそわ。

「やきがたなんて ないですって。」と とまどう リービ。

「ごさいますの、 リービさん。 いったい いずこへ おきえに？」と ダッチェス

。



「ぜったい そんなもの ありませんよ、 ダッチェスさん。 プディングや パイには かなものは つかわないことに してるんです。 とっても あぶないでしょ
——（ほら まるのみしちゃったときとか!）」と さいごのところを ひそひそと

たいそう びくついた ごようすの ダッチェス、 パイのなかを かきまわすばかり。

「うちの 大お婆の スクィンティーナ（いとこの ぐいぐいタピサの おばあさんですけど）—— クリスマス・プディングに 入れる ゆびぬきのせいで おっちんでね、 だから わたし、 けっして プディングや パイに かなものなんか 入れないんです。」

かおを ぎょっとさせる ダッチェス、 パイざらを かたむけます。

「やきがたは 4つしか もってませんけど、 みんな 戸だなのかなかですし。」

ひい、 と 声を あげる ダッチェス。

「死んじゃいますの！ 死にますの！ やきがたを まるのみですの！ ひゃあ リービさん ぐるしいですの！」

「気のせいですよ、 ダッチェスさん。 やきがたなんて ないんです。」

くうんと もだえながら ダッチェスは みを よじらせませす。

「ひっ ぞくぞくしますの。 やきがたを まるのみ！」

「このパイには ないですって。」と いいきる リービ。

「ございましたの、 リービさん。 きっと わたくし それを！」

「手を かしますから よこに なります？ どこの ぐあいが わるいんですか？」

「ひゃ もう からだじゅうが ぐるしゅう、 ございますの。 のみこんだ やきがた、 大きゅうて かなもので まわりが ひだひだで とがってまずの！」



「おいしゃさま、よんできましようか？ とりあえず スプーン かたづけますわ！」

「ひえ、ええ ええ！ むらっけ先生 おつれになって、リービさん。あのかたは マグパイ、カササギですもの きっと おわかりになるはずですよ。」

リービは だんろ前の ソファに ダッチェスを おちつけると、外へ 出て 先生を さがしに 村へと いそぎます。

いたのは かなものづくりの こやでした。

ゆうびんきよくで 手に入れた インクつぼに せっせと さびた くぎを ひたして いました。

「でたでた！ は！ はっ！」と くびを かしげて いました。

リービは わけを はなします、おきゃくさんが やきがたを のみこんだと。すると、

「らめらめ？ は！ はっ！」と こたえて いそいそ ついてきます。



DR. MAGGOTTY'S MIXTURE

ひよいひよい すすむものですから、リービまで はしるはめに なりまして。
めだつたら ありません。リービが 先生 つれていたこと 村じゅうに 知れ
わたったでしょうね。

「それ見たこと、 食べすぎたのよ！」と いとこの ぐいぐいタピサ。



ところが リービが 先生を さがしているあいだに —— みょうなことが ダ
ツセスに おこったのです。ひとり のこされて、 ころぼそく ぜえはあし
ていたのですが、

「まるのみって どうやって？ やきがたみたいな 大きなもの！」

立ち上がって テーブルへと より、 パイざらのなかを また スプーンで さぐ
ります。

「ごさいせんわ、 やきがた。 なかへ 入れましたのに。 パイを 口にしたのは
わたくしだけ、 ですから わたくし のみこんだに ちがいありませんの！」



また こしを おろして、 しょげながら だんろを じーっ。 火は ぱちぱち

ゆらゆら、 さらに なにかが じゅ、 じゅうううう！

ダッチェスは びくっ！ 上のオーブンの とびらを あけると、 もくもくと 出てきたのは こうばしい 子牛と ブタももの かおり、 みごと きつね色の パイが のっかっている — パイきじの てっぺんに あいた あなから ちいさな かなものの やきがたが ちらり！

ダッチェスは しんこきゅう —

「なら わたくしが たべていたのは ネズミ！ どおりで 気持ちわるいはず ですが ほんとに やきがたを まるのみしてたら もっと ひどいことにだって！」ここで かんがえだす ダッチェス — 「やっかいですわ、 このままでは リービに わけを はなすことに！ ここは こっちのパイを うらにわに おいて ないしょに いたしましょう。 おうちへ かえるさい、 うらに まわって こっそり もちだすんですの。」と うら口の外に おいてから、 また だんろわきに すわりこんで 目をつむりました。 リービが 先生をつれて やってきたときには、 ねいているようにしか 見えません。



「でたでた、 は、 はっ？」と 先生。

「ぐあい は かなり よくなりましたの。」と ダッチェスは びくっと おきあがります。

「それを きいて ほっとしました！ おくすりを ひとつぶ おもちなんですって！」

「あのですね みやくを とっていただくだけで、 もう じゅうぶんですの。」と ダッチェスは、 カササギが くちばしに なにか くわえて にじりよってきたので、 あとずさりしまして。

「ただの パンぐすりですから。 とらないと あなた たいへんよ。 ほら、 ミルクを ちょっと ごっくりして、 ダッチェスさん！」

「でたでた？ でたでた？」と 先生の いうかたわら、 せきこんで むせる ダッチェス。

「うるさいわ 先生！」と リービが いきなり おこりだして — 「ほら このジ

ヤムつきパン あげますから、 にわに 出てってよ！」



「でたでた、 らめらめ！ はははっ！」と むらっけ先生は 仕事は おわったとばかりに 声を あげて うら口から 外へ。

「気分は もう すっかり よくなってきてますの。」と ダッチェス。「わたくし、 くらくなる前に かえらないと だめですわね？」

「そのほうが いいかもですよ。 すてきな かたかけ かしてあげますから、 あと わたしの かたも おかりなさいな。」

「どうぞ おかまいなく。 すこぶる よくなりましたの。 むらっけ先生の おくすりが ——」

「あらま やきがたを とっばらったってんなら、 なんて あっばれな！ 明日の 朝ごはんのあと おやすみできたか おたずねに あがりますよ。」

リービと ダッチェスは ねんごろな おわかれを して、 おいとまする ダッチェス。 かえり道、 たちどまって ふりかえります。 リービは もう なかに 入って 戸じまりしていました。 ダッチェスは さくを すりぬけ、 リービのうちの うらへ まわって、 にわを のぞきこみます。

ブタごやの やねに むらっけ先生と 3わの コクマルガラスが ちょこん。 3わの カラスが パイきじを もぐもぐ、 カササギが やきがたから 肉じるを じゆるり。

「でたでた、 は、 はっ！」と 声を あげたのは、 ダッチェスの 黒い ちいさな はなさきが 角から のぞいていることに 気づいたからです。

かけ足で さる ダッチェス、 もう ばつが わるくって！

お茶の どうぐを あらおうと、 バケツ 1ばいの 水くみに 出てきた リービが 見つけたのは、 白地で ふちどりが もも色の パイざら、 しかも にわの どまんなかで こなごなに われていました。 やきがたも 水くみポンプの 下に あったのですが、 これは むらっけ先生が 気を きかせて おいていったものです。



SO THERE REALLY WAS A PATTY-PAN

リービは たまげて じろじろ ——「こんなのって ある？ ってことは、ほん
とに やきがたが あったの？ でも わたしの やきがたは みんな 台所の
戸だなの なかだし。 わたしじゃないって ことは！ つぎ お茶会を ひ
らくときには —— いとこの ぐいぐいタピサを よびましょ！」



Original Text: *The Tale of the Pie and the Patty-Pan* (1905)

Original Author: Beatrix Potter (1866-1943)

パイとやきがたのはなし

<http://p.booklog.jp/book/61966>

著者：ベアトリクス・ポッター

訳者：大久保ゆう

発行：ALZ

発行元情報：<http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61966>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ